55　江戸中期に長崎で行われた病理解剖の記録について

板野　俊文

大通詞である吉雄耕牛（1724～1800）は長崎で成秀館を開き，全国から多くの医師を集め，オランダ語と医学を教育した．初期の著名な日本の蘭学者は，ほとんど彼の教育を受けている．しかし，その学識を知る者は少ない．それは，彼が生前ほとんど著書を残さなかったことによる．富士川游の『本朝医人伝』の「吉雄耕牛」によれば[1]，『因液発備』『紅毛秘事記』『和蘭外科要方』等とあるが，彼の業績からすれば少なすぎる．無論，それぞれの本は重要な役割を果した．例えば『因液発備』は小便を検査して疾病を診断する方法を説いている．『紅毛秘事記』は梅毒の治療薬のスゥーテン水（塩化第二水銀水）の処方をツンベルグから聞いたものを書いており，当時の梅毒治療に大きな貢献をした．また吉雄流水，油，膏薬に関する写本は数多く残っている．これは聴講者が覚えとして書き写したものだが，オランダ語の薬名と薬効が書かれている．しかし，カタカナで書かれた薬名を見るだけで，業績は理解できない．

著者は，偶然，讃岐在住の医師合田強（1723～1773）の書物に触れることができ，吉雄耕牛の講義録を読む機会に恵まれた[註]．その内容から成秀館で病理解剖が行われたことを知った．今回はその実態について報告する．

合田強は講義録第五巻の裏表紙に書かれているが，

宝暦十二年　壬午　正月二十八日　出故国　二月十四日　来長崎　閏四月二十七日　去長崎
五月十一日　帰故郷　凡　百二十日　為旅客也　崑陵山人

これによって，1762年1月から閏4月まで120日間，長崎に行って吉雄塾の講義を聞いたことがわかる．さらに五巻の講義録をまとめて出版しようとまとめた「紅毛医言」は「解体新書」の発刊に先立つこと12年前に書かれたことは注目すべきである．

病理解剖に関しては，講義録の第三巻と四巻の「西洋医述」と題された巻に書かれている．三巻では疾病が述べられている中，具体的に解剖を行った日付がある．

大病ノ死人ハ解テ病元ヲシルコトナリ
　腹ハ金瘡ノ如　縫タルヨキ也
△九月十十一十二正二三月ノ間ニ解臓スルコト也

これは前年の宝暦十一年の九月からすでに一か月に1回病理解剖を行ったことを示す．さらに三巻は四月と閏四月に書かれていることを考えると，引き続いて一か月に一回の割合で解剖が行われたと思われる．三巻の最後の部分に書かれている図は，外国人の胸部を示したものもある．

この説明の後の部分には，多くの解剖図が書かれている．発表ではこれらの写図を示す．

また四巻では，労癆の説明の部分で，

死タ人ヲ解キテミレハ肺ガ拳ノ如クナリタツモアリ　又肺ニ膿ヲ持テルモアリ

以上より，病理解剖という概念が最初に我が国にもたらされて，長崎ではすでに解剖が行われたと考えられる．この1761年から62年は山脇東洋が日本で初の解剖を行った1754年に遅れること7年であるが，くしくも東洋の没年が宝暦十二年八月八日でこの年に当たる．合田強が讃岐に帰ってすぐのころに亡くなったことになる．しかし，東洋の「蔵志」に比べれば，はるかに詳細にわたる解剖図であることがわかる．おそらく当初は阿蘭陀商館付の阿蘭陀人の医師が行ったと考えられるが，回数が多いことから吉雄耕牛や弟の蘆風も執刀した可能性がある．いずれにせよ「解体新書」以前に多くの解剖が長崎では日常的に行われていたこととなる．

1）富士川游　富士川游著作集　第七巻　P. 339–3410，1981年
註）香川大学図書館医学部分館（香川県木田郡三木町池戸1750-1）